様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１７７０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2021
課題番号：２０Ｋ２２２３９

研究課題名（和文）国内大学生による短期留学の教育効果の測定に関する実証研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on Measuring the Educational Effectiveness of Short-Term Study Abroad Programs by Japanese University Students

研究代表者
小林　元気（Kobayashi, Genki）

鹿児島大学・総合科学域総合教育学系・准教授

研究者番号：１０８７８１４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、国内大学による短期留学の教育的成果として「グローバル・マインディッドネス」という尺度に着目し、日本社会における大卒若年層のグローバルマインドの特徴を描くとともに、短期留学経験の有無によりグローバル・マインディッドネスの獲得状況がどのように異なるのかについて検討した。
分析の結果、大学在学中の短期留学経験は、大学入学前の初期条件や、大学在学中の留学以外の環境条件を考慮したうえでも、グローバル・マインディッドネスの獲得に有意なインパクトをもっていた。また、そのような留学の効果は、その意義が疑問視されてきた３か月未満の短期間の留学においても生じていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果の学術的意義は、現代日本社会におけるグローバルマインドの特徴として、反エスノセントリズム的志向が欠落していることを明らかにし、そのうえで、その他のグローバルマインドを規定する要因について、短期留学経験や国内での外国人との交流といった国際交流経験のインパクトを初めて実証的に示したことにある。
また、国内大学が精力的に取り組んできた短期留学プログラムの教育的成果として、グローバルな自己効力感や世界と接続しているという感覚、国境を超えた責任感、文化の多様性に対する価値志向といったグローバルマインドの醸成に繋がっているという知見は、社会的な意義をもつものと考える。

研究成果の概要（英文）：In this research, we focused on the measure of "global-mindedness" as an educational outcome of short-term study abroad by Japanese university students, and examined the characteristics of the global- mindedness of young university graduates in Japanese society, as well as how the acquisition of global- mindedness differs depending on the experience of short-term study abroad program.
Results showed that short-term study abroad experience had a significant impact on the acquisition of global-mindedness, even after taking into account initial conditions before entering university and environmental conditions. Such effects of study abroad also occurred even for short-term study abroad experiences of less than three months.

研究分野：教育社会学

キーワード：グローバル・マインディッドネス　global mindedness　留学　インパクト　IEOモデル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

臨時教育審議会以降、教育政策においてグローバル化する世界への対応は優先度の高い課題であり続けており、グローバル市場で活躍可能な人材を育成するための手段として、日本人若年層の海外留学が重視されるようになった。政府は学位取得を目的とした長期（主に 2 年以上）の留学者数を 6 万人から 12 万人へと倍増させる政策目標を設定し、2010 年代以降様々な留学促進政策を講じてきた。しかしながら、それらの政策は長期留学ではなく国内大学生等による短期（97.5%は 1 年未満）の留学者数の増加につながっている。

総務省はこの点を課題として認識しており、政策評価において「今後、グローバル人材の育成を推進する上で、短期留学を政策上どのように位置付けるのかを明らかにする必要がある」と指摘している（総務省 2017: 164）。すなわち、短期留学の教育的意義を明らかにすることは、2021 年度以降の留学政策の方向性を考える上で極めて重要な課題である。そこで、本研究は短期留学の教育的意義として「グローバル・マインディッドネス」の獲得可能性に着目する。

グローバル・マインディッドネスとは、超国家的な観点から他者との関係性や社会の課題をとらえ、不平等や不正を批判的に問い直し、インクルーシブな社会の実現を志向する認知的態度である。類似する概念として「インターナショナル・マインディッドネス」「グローバル・コンピテンシー」「グローバル・シチズンシップ」「コスモポリタニズム」等が議論されており、グローバルな課題を解決するための教育目標として学術的関心を集めている（Park et al. 2016; Beck and Sznaider 2006 等）。これらの認知的態度は近年の教育政策において育成が求められているコンピテンシーであり（OECD 2018）、短期留学経験とグローバル・マインディッドネスの関連性は留学促進政策を意義づける重要なエビデンスとなる。以上をふまえ、本研究では、「短期留学経験はグローバル・マインディッドネスの獲得にどのように影響するのか」というリサーチ・クエスチョンを設定する。

２．研究の目的

本研究の目的は 2 つある。第一に、Hett（1993）により米国の大学生を対象として開発された「グローバル・マインディッドネス」尺度（以下、GMS）に着目し、日本の若年層に対する援用可能性について検討すること、第二に、短期留学の教育的成果（インパクト）としてグローバル・マインディッドネスの獲得を位置づけ、短期留学経験の有無により大卒者のグローバル・マインディッドネスの獲得状況がどのように異なるのかについて検討することである。

３．研究の方法

本研究では、個人の短期留学経験とグローバル・マインディッドネスの因果関係について検証するために、カレッジ・インパクト研究における IEO モデル（Astin 1993）を援用する（図 1）。IEO モデルの特徴は、教育成果（Outputs）の要因として、教育が行われた環境（Environments）の差異だけではなく、教育に先行する初期条件（Inputs）の影響も考慮する点にあり、本研究は図 1 のモデルを用いて分析を行う。これにより、出身家庭の社会経済的要因や英語学力、成育歴における海外滞在経験といった初期条件（I）や、出身大学の専攻や入試難易度、国内での国際交流経験等の環境要因（E）の効果との関連性をふまえて、短期留学経験の有無がグローバル・マインディッドネスの獲得（O）に対してどのように影響しているのかを明らかにする。

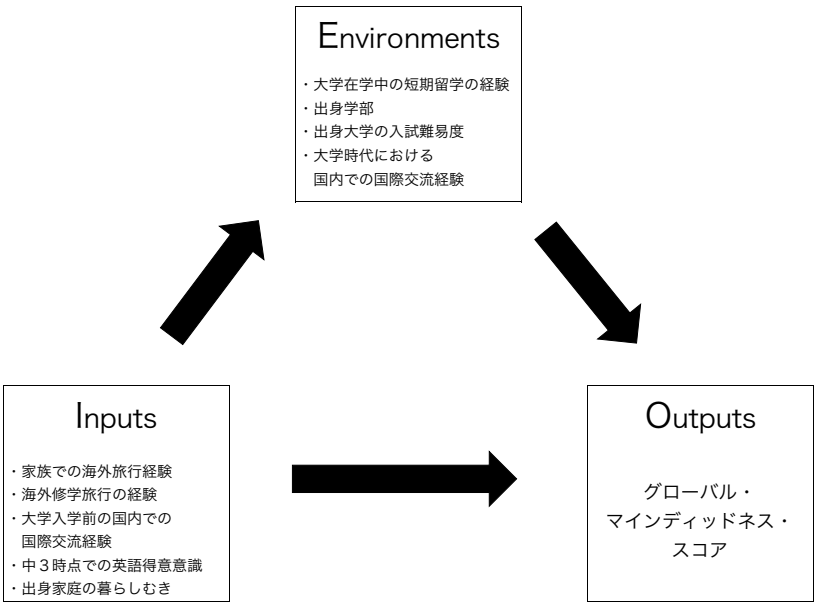

図１　短期留学の成果を測定する IEO モデル

本研究にて行う具体的な作業は以下のとおりである。第一に、Hett（1993）が開発した GMS について、それらを各国で使用した先行研究もふまえながら、日本の若年層に対する測定に適した尺度へと修正を行う。第二に、2010 年代の留学促進政策を経験した 20 代の国内大卒者を対象としたインターネット全国調査を行い、日本の若年層のグローバル・マインディッドネスの特徴について検証する。第三に、大学在学中の短期留学経験の有無が、その他の環境要因や、大学入学前の数々の初期条件をコントロールしたうえで、グローバル・マインディッドネスの獲得にどのように影響を及ぼすのかについて、多変量解析により検証する。

４．研究成果

⑴　日本の若年層のグローバル・マインディッドネスの特徴

2017 年から 2020 年の期間に 4 年制大学を卒業した――COVID-19 の世界的感染拡大以前に対面型の海外留学を経験可能であった――国内在住者に対して、2022 年 3 月にインターネット調査を実施し、すべての質問に回答した全国 2,252 人のデータを得た。

Hett（1993）の開発した GMS では、米国大学生のグローバルマインドにおいて「文化的多元主義」「グローバルな自己効力感」「グローバルな相互接続性」「グローバルな責任意識」「グローバル中心主義」の 5 因子構造が認められた。一方で、日本の 20 代若年層を広く対象とした本研究のサンプルデータを用いて探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、次の 2 点において米国の事例とは異なる結果が得られた。

第一に、「グローバルな自己効力感」「グローバルな相互接続性」は同一の因子として析出され、「文化的多元主義」「グローバルな自己効力感と相互接続性」「グローバルな責任意識」「グローバル中心主義」の 4 因子構造として把握された。日本の若者層においては、自身の言動が国境を超えて影響するという効力感と、自身が国内にとどまらず世界と繋がっているという接続意識は、同一の傾向性をもつということである。

第二に、4 つの因子の相関関係を調べたところ、「グローバル中心主義」の因子のみ他の 3 つの因子と負の関係がみられた。すなわち、現代日本における若年層のグローバルマインドの特徴として、エスノセントリズムを克服しようとする志向性としての「グローバル中心主義」を見出すことはできなかった。

上記の結果を受けて、「グローバル中心主義」に関する項目を削除して再度因子分析を行ったところ、「グローバルな自己効力感と相互接続性」（7 項目）、「グローバルな責任意識」（6 項目）、「文化的多元主義」（6 項目）で構成される 3 因子構造が得られた（表 1）。回転前の 3 因子が全 19 項目の全分散を説明する割合は 51.98%であり、3 つの因子は互いに正の相関関係にある。内的整合性に関しても、全 19 項目で $\alpha=0.90$、「グローバルな自己効力感と相互接続性」で $\alpha=0.80$、「グローバルな責任意識」で $\alpha=0.84$、「文化的多元主義」で $\alpha=0.80$ と十分な値を示した。

以上から、この 19 項目のリッカートスケールの合計得点について、日本人若年層のグローバルマインドを操作化するための「GMS トータルスコア」として使用する。「GMS トータルスコア」の分布を図 2 に示す。

表１　GMS の探索的因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

		F1	F2	F3
グローバルな自己効力感と相互接続性 Efficacy & Interconnectedness	私の行動は、他の国の人々に影響を与えることができると思う。	0.71	0.01	-0.03
	私の行動は、世界に影響を与えることもあると思う。	0.66	0.09	-0.01
	自分自身をグローバル社会の一員だと感じることは、あまりない。（R）	0.61	-0.12	-0.01
	私は、世界各国の人間にとても親近感を感じる。	0.59	0.10	0.07
	実際のところ、グローバルな問題に関して私にできることは何もないと思う。（R）	0.55	-0.11	0.00
	私は自分自身について、日本社会の一市民であるだけでなく、世界の一市民であるとも考えている。	0.49	0.21	0.03
	未来の世代のためにどのような世界を作っていくべきかについてよく考える。	0.37	0.05	0.15
グローバルな責任意識 Responsibility	アフリカの国で何千人もの人が飢えていると聞くと、とてもつらい気持ちになる。	-0.20	0.81	0.09
	外国で洪水によって5万人が命を落としたというようなニュースを聞くと、私はとても落ち込む。	-0.16	0.81	0.08
	世界の一部の人たちが過酷な生活をしているのを見ると、私はそれについて何かをしなければならないという責任を感じる。	0.25	0.62	-0.04
	日本人には、世界の恵まれない人々に富を分け与える道徳的義務がある。	0.11	0.55	0.01
	いつもお腹を空かせている人の気持ちを想像してみることがある。	0.25	0.54	-0.17
	私は、政治的に人権が尊重されない国で暮らす人々の生活をとても心配している。	0.01	0.49	0.22
文化的多元主義 Cultural Plualism	文化の背景が異なる人々と話すことを面白いと感じる。	0.14	-0.18	0.74
	文化の異なる人々の行動を理解しようとすることは、私にとって楽しいことである。	0.21	-0.07	0.69
	国の教育制度が、異なる民族的・文化的背景をもつ生徒・学生間の理解を促進するための教育プログラムを提供することは重要である。	-0.14	0.15	0.67
	日本人は、さまざまな異文化から価値あるものを学ぶことができる。	-0.10	0.08	0.64
	外国の人々を受け入れることで、日本は豊かになっている。	0.01	0.09	0.49
	現在の政策が未来の世代にどのような影響を与えるかについて、人々が理解できるようになるために、学校教育は重要な役割を果たしていると思う。	0.01	0.14	0.40
	α係数	0.80	0.84	0.80

因子間相関	F1	F2	F3
F1	-	0.56	0.53
F2		-	0.63
F3			-

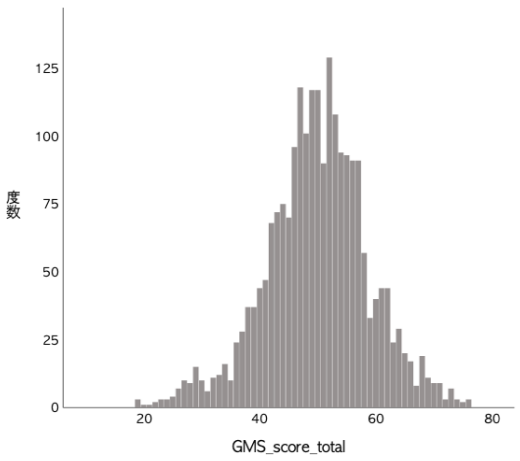

図２　本調査における GMS トータルスコアの分布

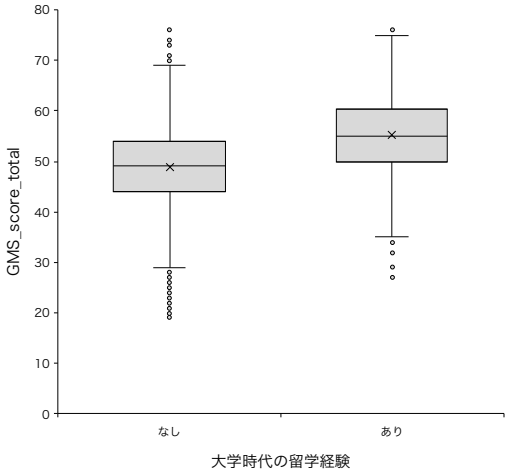

図３　短期留学経験別に見た GMS トータルスコア

⑵　大学在学中の短期留学経験のグローバル・マインディッドネスへの影響

次に、大学在学中の短期留学経験の有無により、グローバル・マインディッドネスに差が生じるかどうかを検討する。短期留学経験がない者（$M = 48.8, SD = 8.60, N = 1862$）と短期留学経験をもつ者（$M = 55.2, SD = 8.59, N = 390$）の GMS トータルスコアについて t 検定を行った結果、両群に有意な差がみられた（$t(2250) = -13.29, p = .000$）。スコア分布の箱ひげ図を図 3 に示す。

このような短期留学経験群の GMS の高さは、元来グローバルマインドを備えていた学生が留学に参加したことでもたらされている可能性がある。そこで、図 1 の IEO モデルにもとづき、短期留学経験以外の変数を統制した重回帰分析を行った（表 2）。

表２　GMS トータルスコアの規定要因（重回帰分析）

		モデル１			モデル２			モデル３		
		B	β		B	β		B	β	
	（定数）	41.023		***	36.834		***	38.220		***
統制変数	女性ダミー	1.395	0.070	***	1.567	0.078	***	1.365	0.068	***
Inputs変数	家族での海外旅行回数	0.711	0.081	***	0.561	0.064	**	0.373	0.042	*
	海外修学旅行ダミー	0.815	0.037	†	0.888	0.040	*	0.638	0.029	
	国内での外国人との交流機会（大学入学前）	2.085	0.194	***	1.166	0.108	***	1.118	0.104	***
	中３時点での英語得意意識	0.958	0.153	***	0.696	0.111	***	0.564	0.090	***
	中３時点での家庭の暮らしむき	0.124	0.013		0.085	0.009		0.018	0.002	
Environments 変数	出身学部（ref. 理科系）									
	文科系				1.027	0.056	*	0.749	0.041	
	医歯薬系				1.012	0.035		1.118	0.038	
	その他				0.603	0.016		0.671	0.018	
	出身大学の入試難易度				0.430	0.058	**	0.389	0.052	**
	国内での外国人との交流機会（大学時代）				1.992	0.211	***	1.702	0.181	***
留学経験変数	留学経験（ref. 留学経験なし）									
	３か月未満の留学経験							3.235	0.120	***
	３か月以上の留学経験							4.469	0.115	***
	調整済みR2	0.099			0.139			0.160		
	N	2166			2166			2166		

*** : p < .001, ** : p < .01, * : p < .05, † : p < .1

モデル 1 では、統制変数としての女性ダミーと、大学入学前の初期条件である Inputs 変数（家族での海外旅行回数、修学旅行で海外に渡航した経験、国内での外国人との交流経験、中３時点での英語得意意識、中３時点での家庭の暮らしむき）の変数を投入し、GMS トータルスコアへの影響を検討した。「家庭の暮らしむき」を除いていずれも有意な正の効果がみられた。

モデル 2 では、Inputs 変数に加えて、大学在学中の留学を除く環境要因としての Environments 変数（出身学部、出身大学の入試難易度、国内での外国人との交流経験）を投入した。Inputs 変数の係数は小さくなりつつも有意な正の効果は残り、文科系学部への在籍や出身大学の難易度の高さ、国内での外国人との交流経験が正の効果をもつ。

最後にモデル 3 で留学経験に関する変数を投入したところ、モデルの説明力は向上し、Environments 変数と Inputs 変数を統制したうえでも有意な正の影響がみられた。標準偏回帰係数から、留学経験は GMS トータルスコアに対して一定の効果をもつが、大学入学前・大学在学中

の国内での外国人との交流経験による影響も大きい。また、海外修学旅行と文科系学部の効果は消失しており、これらの変数は短期留学経験を経由して GMS トータルスコアへの効果を及ぼしていた可能性がある。

以上の結果から、次の 3 点が示唆される。

第一に、大学生の短期留学経験は、IEO モデルをふまえた様々な条件を考慮したうえでも、グローバル・マインディッドネスの獲得に有意なインパクトをもっている。また、その効果は、時にその意義が疑問視されてきた 3 か月未満の短期間の留学においても生じているものである。

第二に、国内で外国人と交流する機会をもつことは、グローバル・マインディッドネスの獲得において、短期留学と同等もしくはそれ以上の影響がある。

第三に、国際的な経験とは独立して、女性であること、英語の得意意識、出身大学の入試難易度により示される個人の学力が、それぞれグローバル・マインディッドネスに影響している。

⑶ 今後の展望

本研究の次なる課題として、次の 3 つに取り組む予定である。

第一に、グローバル・マインディッドネスの規定要因については、3 つの因子別の詳細な分析や、各独立変数間の複雑な影響関係を明らかにしていく必要がある。そのために、親の教育年数や海外経験等の変数も加えた共分散構造分析による検討を計画している。

第二に、日本人若年層のグローバル・マインディッドネスの特質を描くための国際比較研究である。本研究で明らかになったように、現代日本の若年層のグローバル・マインディッドネスにおいて、90 年代の米国大学生に観察された脱エスノセントリズムの志向性としての「グローバル中心主義」は把握できなかった。「グローバル中心主義」は、「環境にわずかな悪影響を与えるだけですむなら、日本人は豊かな生活水準を追求してもよい」「国際関係のなかで他国と交渉する際、日本のニーズを最優先してほしい」といった経済ナショナリズム的項目や、「他の国の人たちが日本人の考え方を理解していないので、イライラすることがある」「日本人の価値観は、たぶん最高のものだと思う」などのエスノセントリズム的項目のように逆転質問で構成されているものの、それらは日本人若年層のグローバルマインドとは連動していない。これが日本的特質なのか、時代の効果であるのかについて、国際比較の視点から検証する必要がある。

第三に、パンデミック以降のオンライン留学を経験したサンプルとの比較研究である。2022 年現在、多くの国内大学がオンライン留学を余儀なくされているなかで、従来の留学とオンライン留学の教育効果がどのように異なるのかを量的に把握することは喫緊の課題であろう。

参考引用文献

総務省，2017,「グローバル人材育成の推進に関する政策評価書」総務省ウェブサイト.

Astin, A. W., 1993, *Assessment for Excellence: The Philosophy and Practice of Assessment and Evaluation in Higher Education*, ORYX Press.

Beck, U. and Sznaider, N., 2006, “Unpacking cosmopolitanism for the social sciences: A research agenda,” *The British Journal of Sociology* 57: 1‑23.

Hett, E. J., 1993, *The development of an instrument to measure global-mindedness*, (Doctoral dissertation). Available from ProQuest Dissertations and Theses database. (UMI No. 9408210)

OECD, 2018, *Preparing Our Youth for an Inclusive and Sustainable World: The OECD PISA Global Competence Framework*, OECD ウェブサイト.

Park, H. S., Slobuski, T., Durkee, C., 2016, “Global Mindedness and Global Citizenship Education,” (DOI: 10.1093/OBO/9780199756810-0161).

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小林元気
２．発表標題 大学生の生育歴における留学志向形成プロセスの４類型
３．学会等名 日本子ども社会学会第27回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 小林元気
２．発表標題 日本の留学派遣制度が内在するトリレンマ――なぜ長期留学ではなく短期留学が増加するのか――
３．学会等名 第72回日本教育社会学会大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関